

68 明治9年5月30日 菊池長閑宛

(長閑注記) 第五号 五月三十日認む四号の御返事三号未達

郵便切手ハ御樂の種と成たる由思の外の事と喜悅致居なり其許にて切手御集めハ如何にも六ヶ敷かるへし夫ニ付余の品御送被下様御心配の所切手并織物切端在中の御手紙河上氏に不届由甚残念の事なり然し遅く共紛失セすに届様祈居たり石代金上納滞十五万円も有之由荷物運送の便開ケ直の高所に持行て轟々売捌

様に不成ハ百姓の迷惑一方ならざる事と被思ます今迄ハ俵に詰て蔵に収むれハ百姓の役ハ済たなれ共今てハ売捌方と云余計の苦勞可有一斗の米を売ハ事易かりしなれ共十石の穀を鬻ハ余程難渋なるへし今の百姓ハ商売の道も心得ねは成らぬなるへし三人写の写真一件ハ如何成たるや間違ハ御分りに成ましたか報知新聞藤村に頼置たる所只二度送来たる而已にて一向後ハ不来藤村の怠りか新聞屋の懶りか河上迄聞に遣たれ共未タ宛とした返答ハ不参自然藤村金銭不勝手より起たる事ならハ御迷惑にハ思え共要用丈の金子を河上に直送被成下新聞屋より直送すれハ猶の事左なくハ河上より送貰方可然と存ますから何卒右様御取計願ます猶河上にも右の趣を申遣す可し先達迄信方君と同部屋に居たれ共何分勉強に不都合故ポストンより二里程離れた□ドーチエスタルと申所に移たり府内なれ共繁雜の地と掛離れ東京なれハ目黒洲寄又ハ向島と云風な趣なり近隣家数少なく酒屋へ三里豆腐屋へ四里なから鉄道馬車道ありて通稽古町用達にハ不自由なく二十分にて蒸汽車ハポストンに着なり丘に登れハポストン港のの景尤美にて府及ヒ四方の村々山川を見渡セハ大に慰に成なり先達ても申上たる通府に居時ハ花咲樹を見さりし所転居以來諸方森林有て花咲樹も多候桜橋子ハ既に落花して今ハ梨の花盛なり当時の内ハ御祖母様八十近ナリに姪二人の家内にて孰れも信切者なり亜墨利加人ハ大体金を取時計御愛想すれ共内の者ハ此類に非私ハ学校に往時ハ朝十時頃に内を出て三時の車にて帰宅する故家内ハ昼に軽食して私共帰宅後本統ほんすけの昼飯を喰なり稽古する間ハ空腹セぬ故何にも不持に出懸様と思共御祖母様ハ中々

承知せず何時でも菓物か菓子を無理に為持なり此にて余の儀にも能信切に世話致呉事御推察被下へし一人の姪ハ毎夜南部君に素読を教呉故学校の外の稽古ハ出来南部君の為にハ誠に結構なり南部君ハ物云事ハ知ぬも不知嫌も嫌て人ハ問ねば一日も黙て居風なれハ姪と私にて物を云する事を骨折居なり大名育ハ実

叶ぬと見得る右の新聞本統ほんぐんならば彼大博覧会て世界中の国々を追越した訳なるへし是らハ猶精出して細工□□ハ折角取た名も失へし

(長閑注記)

「七月三十日達 日数六十
一日ナリ

(朱書)
「七月三十日達日数六十一日」

に果れ返丈込つたもの也私ハ今年の吟味を二十六日迄に済し十月迄の休みを得たり博覧会にハ是非往て見様と思が何しろ四ヶ月の休を何様して暮うかと心配なり稽古をするにハ金か入し去迎遊て計凌事ハ稽古するより却六ヶ敷思ハる吟味の始末ハ未タ分ねど悪ハ有まいと考える間ハ思たより遥安かりしなり此間から責られて仕方なく皆様の写真を為見たが十余人の女子供ハ孰も同説にて日本人ハ皺寄ぬか御祖母様年に合てハ大想若い豆し想な好御祖母様たと云ひお磯さんと御留さんハ一番可愛らしいと申たり二人ハ西洋人の好な顔と見得る叔父様や伯母様方へ宜く大矢へも同様先此度ハ是にて左様なら

武夫拜

御尊父様

至机下

フキラデルフキア府の博覧会ハ日増に見物人多来由当地にてハ日本物殊の外評判能日本て舶来物を好より猶甚田舎者の東京土産を珍重する如し其証拠ハ今度持来た物ハ一品も不残買主か定より未タ一月ならざるに最早余品なしとの新聞なり何とも奇麗な物ハ日本物と名付由手細工に於てハ毛唐人等ハ迎も日本人に